



黒木由美

- 4 -



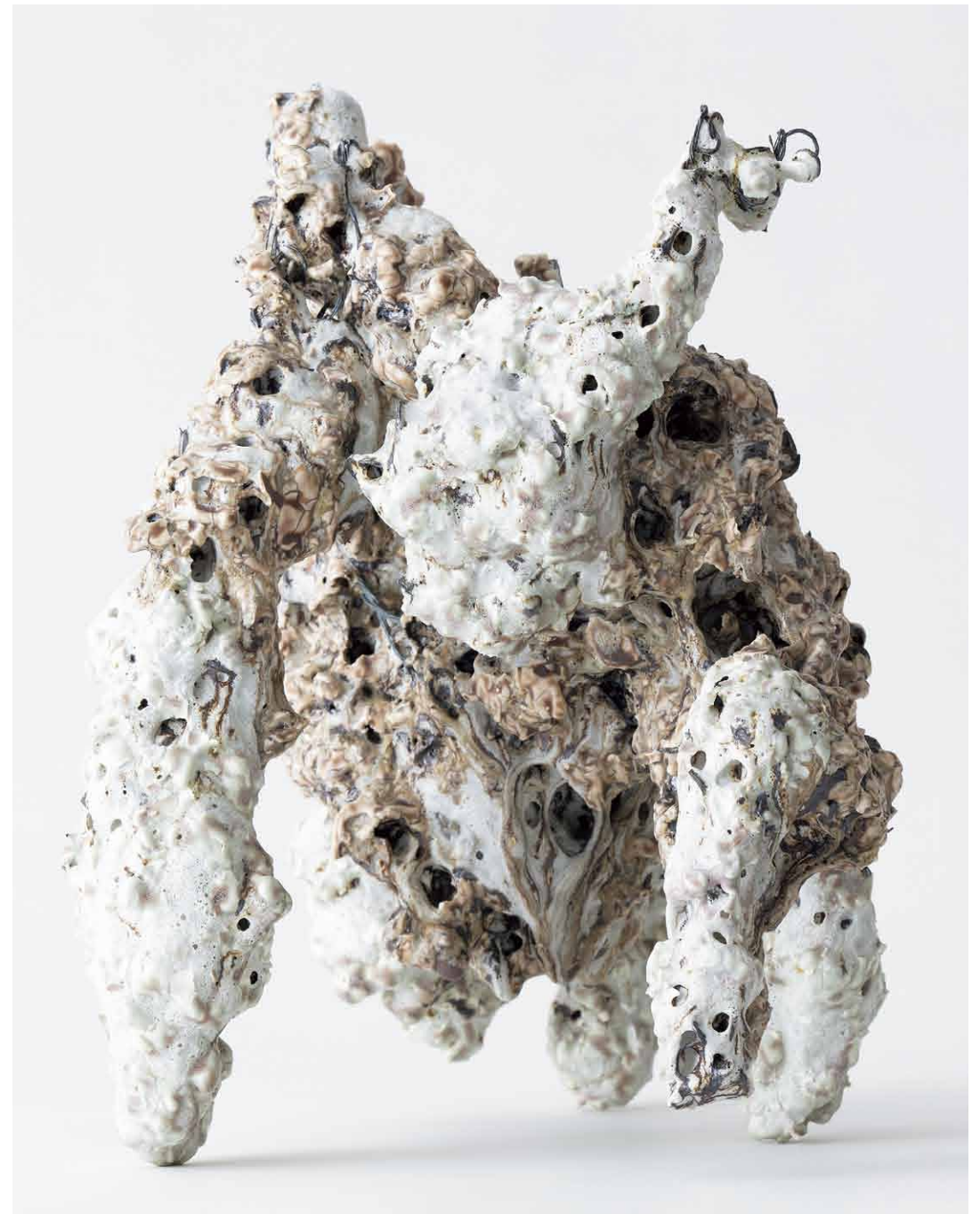
《#62》2024年 釉薬、針金、磁土 13.0×13.0×8.0 cm 作家蔵
#62, 2024, Glaze, wire, porcelain, 13.0×13.0×8.0 cm, Collection of the Artist

佐賀大学美術館では、地域の芸術文化交流地点として、様々な人が地域ゆかりの文化・芸術に触れることを目的に、九州を拠点に活動をする若手・中堅アーティストを個展形式で紹介する企画展「SUAM/ROOT」を開催します。

第2回目となる本展では、2019年に佐賀大学大学院地域デザイン研究科修士課程を修了し、現在は宮城県を拠点に活動を続ける黒木由美を紹介いたします。黒木は、「生きるだけのいきもの」をテーマとし、窯の中の焼成を生かした釉薬による造形表現を追求しています。本来やきものにおいて釉薬は主に装飾として用いられますが、黒木は釉薬そのもので造形を行っています。作品の支持体には針金を用いて、発泡する釉薬で造形し、吊下げて焼成を行うことで独自の有機的な形を生み出しています。本展のタイトルとなった「り(ナチュラル)」は、音楽記号で「元の音に戻す」意味を示します。黒木の制作の土台は本学在学中の釉薬の研究にあり、作品制作は自身が戻ってくる場所のように感じるといいます。

変化が激しく、ときに迅速な判断や明確な態度が求められる現代の私たちの生活においては、あいまいさとも言い換えられる偶然性や不確実性を持つ事柄は敬遠されがちです。一方で、現代はこれまでになく先の見通せない時代にあるともいわれています。陶芸はその制作のプロセスにおいて予測不可能なことが多く起こりますが、黒木の素材研究と繰り返し行われる実験によって生み出された作品からは、単なる偶然性では言い表せない表現を見ることができます。創造性と偶然性が生み出す豊かな表現は、私たちの日常に潜んでいる「意識を向けていない可能性」にも気づきをあたえてくれるのではないのでしょうか。

最後に、本展覧会の開催にあたり、作家である黒木由美氏、助成いただきました公益財団法人 金子財団様、並びに多大なご教示とご協力を賜りました関係各位に心よりお礼申し上げます。



《#14》2022年 釉薬、針金、磁土 27.0×29.0×24.0 cm 作家蔵
#14, 2022, Glaze, Wire, Porcelain, 27.0×29.0×24.0 cm, Collection of the Artist



《#12》2022年 釉薬、針金 20.0×13.0×12.0 cm 作家蔵
 #12, 2022, Glaze, wire, 20.0×13.0×12.0 cm, Collection of the Artist



《#15》2022年 釉薬、針金、磁土 48.0×27.0×18.0 cm 作家蔵
 #15, 2022, Glaze, wire, porcelain, 48.0×27.0×18.0 cm, Collection of the Artist

《#9》2022年 釉薬、針金、磁土 12.0×12.5×7.0 cm 作家蔵
 #9, 2022, Glaze, wire, porcelain, 12.0×12.5×7.0 cm
 Collection of the Artist



《#10》2022年 釉薬、針金、磁土 13.0×16.0×9.0 cm 作家蔵
 #10, 2022, Glaze, wire, porcelain, 13.0×16.0×9.0 cm, Collection of the Artist



《#18》2022年 釉薬、針金、磁土 18.0×20.0×15.0 cm 作家蔵
 #18, 2022, Glaze, wire, porcelain, 18.0×20.0×15.0 cm
 Collection of the Artist



《#23》2022年 釉薬、針金、磁土 19.0×9.0×8.0 cm, 9.0×8.0×3.0 cm 作家蔵
 #23, 2022, Glaze, wire, porcelain, 19.0×9.0×8.0 cm, 9.0×8.0×3.0 cm
 Collection of the Artist



不確かさに身をゆだねる

五十嵐 純 [本展企画／佐賀大学美術館 学芸員]

変化が激しく、ときに迅速な判断や明確な態度が求められる現代の私たちの生活において、偶然性や不確実性を持つ事柄は敬遠されがちである。スマホでは画像や音声で検索することができるようになり、倫理的な回答は生成AIが瞬間に作り出す。模範解答を出すということにおいて、私たちは悩む必要さえなくなったと言ってもいいだろう。日常においては、(その精度はともかく)知らないままでいることのほうが少ないのではないだろうか。しかし一方で、現代はこれまでになく先の見通せない時代にあるといわれている。そのような時代を生き抜くスキルは、情報処理能力や行動力であるとされ、知ることと解決するための技術は今後も加速を続けるだろう。不確かさや曖昧さはネガティブなものとして、多数派によって作られる「常識」から「らしさ」が形成される。誰かが定めた仮の「正しきらしさ」や「美しきらしさ」との比較に、居心地の悪さや息苦しさを感じたことはないだろうか。このような「らしさ」からの解放を考えるうえで、陶芸の持つ偶然性に満ちた世界は、私たちに新たな視点を与えてくれるかもしれない。

陶芸は、その制作のプロセスにおいて予測不可能なことが多く起こるといわれている。特に焼成における釉薬の化学反応が生み出す表現は、他の芸術作品の素材とは大きく異なり、人智を超えた複雑な表情を帯びることがある。それこそが多くの人を魅了する一つの理由だろう。黒木由美は、「生きるだけのいきもの」をテーマに、支持体となる針金に発泡する釉薬をまわす、窯の中の焼成による変化を生かした陶による作品を制作している。作品の多くは、細胞や泡、菌類や原初的な生命体を想起させ、細胞分裂による生命の増殖、もしくは溶解してゆく様にも見ることができる。近年の作品には「#」のちに数字がつけられるのみで、想像を広げられるようなタイトルがない。作品ごとに色や形も異なり、表面から受け取れる堅牢さや脆弱さも実に様々である。釉薬の研究から作品制作を始めた黒木の作品には確

かな技術が反映されているが、素材や窯の扱いの上達によって、出来上がりをコントロールできるようになることに黒木の強い興味はないように思われる。実際に、作品にならないものも多く、決して効率の良い作り方ではないと本人も話している。作品を生み出す最後の過程としての窯が引き起こす偶然性に身をゆだね、「生きるだけのいきもの」が生み出される。選ばれなかった作品を想像してみれば、高温に耐えられず、溶けだしてしまうものや、変化を起こさないもの、または支持体の強度が足りず、崩れ落ちてしまうものがあるだろう。それらは、「生きられなかったもの」として、作品化されない。窯から生まれ出るものの美醜を問わず、強くもしくは儂く生きるもののみが作品となるのだ。

黒木の作品を見ていると、複雑で、名付けがたく、わからない。しかし、あえてその判断を保留してみる。そのままを受け入れることで見えてくる「らしさ」から解放された姿が浮かび上がり、そこに生の根源を重ねることができのではないだろうか。予測不能な偶然性に身をゆだね、不確かさの中に留まってみる。そのままであることを愛おしみ、受容することが、私たち自身の生の肯定にも繋がる。黒木の作品が示すように、不確実なものを受け入れることこそが、私たちの生き方をより自由で豊かにする鍵となるのかもしれない。

《#6》2018年 釉薬、針金、ファイアンス 40.0×13.0×20.0 cm 作家蔵
#6, 2018, Glaze, wire, faience, 40.0×13.0×20.0 cm, Collection of the Artist



私は、生きるだけのいきものをテーマに針金とガラス質の釉薬を用いて窯の焼成を活かした作品を制作している。窯の中で針金が歪み、釉薬がパンのように膨らみ、有機的ないきもののような造形が生まれる。作品の形態は焼成前後で変化し、窯から出した姿にいつも驚かされ、その変化に面白さを感じている。

私は最近、食も美術に共通するところがあるのではないかと思っている。料理から作り手の人柄や生き方に触れ、心が救われることもあれば、未知なる食べ物に対して拒絶感を抱くことや正解かどうかわからない瞬間もある。そんな未知なる食べ物に対しても、食べ進めるうちに美味しい以外の魅力的な食べ物だと気付くことがある。美味しいかどうかは自分の経験に基づき、判断されるもので、記憶を辿れないものに対しては正解かどうかの判断ができないのだと思う。作品鑑賞についても、もしかしたら人に対しても同様なことが言えるのかもしれない。

私は釉薬の素材探求で制作を続けており、私の作品が正しいのかどうか私にもわからない。

そもそも釉薬とは主にやきもの素焼きの生地に施されるガラス質の素材であり、器の装飾や強度、衛生面強化のために用いられるものである。釉薬は使う材料、成分の比率により、表情が変わる。酸化金属を添加すれば色や質感のバリエーションはさらに広がる。また、釉薬は成分的に土とガラスの間であり、土も加熱や材料の添加で融解でき、ガラス質になる。

器に個性を出したいと思いついた釉薬の世界も、醜さと美しさを持つルーシー・リーの熔岩釉に魅了され、土と釉薬の境界線に疑問を持ったことで、釉薬への関心はさらに高まった。釉薬

の試験を進め、大学の卒業制作では粘土のように成形できる発泡する釉薬を作成し、紐状の釉薬と土を積み上げ、窯の中で崩壊することでいきもののような造形が生まれた。その後、大学院で土と釉薬の両方の特性を持つ古代オリエントのファイアンスの研究を行い、現在の針金と発泡する釉薬を用いた制作を行うようになった。

そして、最近土に加え、灰を発泡させた作品を制作し、縄文時代から続くやきものも現代の材料を使うことで、新しい素材が生まれることにさらに釉薬表現の面白さを感じている。窯仕事には人間の想像を超えた世界が広がっている。

釉薬の試験はその都度、幾度も行うが、窯の中でできる造形は不思議なもので、その時の心象や風景が表れ、生きるだけのいきものが生み出されている。

意図したわけではないが、針金が骨で、発泡する釉薬が細胞のようにも思えるし、焼成前後の変化がいきものの成長のようにも、進化のようにも思えてきた。

そして、窯の中で生まれたいきものはいつも整った姿とは限らない。醜いものもいれば、魅力的なものもいる。その取捨選択は現実世界と重なるようにも感じる。

窯仕事を行いながら、自分自身の作品や制作に助けられ、何より私以上に作品に思いを寄せて頂けることが糧となり、制作を続けている。

そして、最近、私の釉薬による造形表現の研究と作品がどのように解釈されるのか、興味が湧いている。釉薬研究による作品がさらに発展し、私の想像を超え、より広く、人々に届くことを望んでいる。

黒木由美

Profile

黒木由美
KUROKI Yumi

1991年、福岡市生まれ。陶芸作家。「生きるだけのいきもの」をテーマとし、窯の中の焼成を生かした釉薬による造形表現を追求している。釉薬と土の両方の特性をもつ古代オリエントのファイアンスの研究により、針金と釉薬を用いた独自の制作技法で作品制作を行っている。美しさや醜さ、増殖や消滅などの相反する意味をもつ泡の質感に惹かれ、泡のように膨らむ釉薬素材と技法、自身の感情が相互に作用し、形や色となって導き出され、焼成の結果、生きもののような有機的な造形を生み出している。主な個展に「黒木由美 #1」(2022年、福岡)、主なグループ展に「紀南アートウィーク 2024 いごくたまる、またいごく」(2024年、和歌山県)など。その他に瀬戸国際セラミック&ガラスアート交流プログラム レジデンス参加(2022年、愛知)など。

— 展覧会 —

SUAM/ROOT Vol.2 黒木由美 — 4 —

会期：2024年11月26日（火）～2025年3月9日（日）

会場：佐賀大学美術館 特別展示室

主催：佐賀大学美術館

助成：公益財団法人 金子財団

企画：五十嵐 純（佐賀大学美術館）

— 記録集 —

2024年11月29日発行

企画・発行：佐賀大学美術館

編集・執筆：五十嵐 純（佐賀大学美術館）

デザイン：殿岡 渉（あしか図案）

撮影：江口 弘一

印刷・製本：大同印刷株式会社

佐賀大学美術館

〒840-8502 佐賀県佐賀市本庄町1

1, Honjomachi, Saga City, Saga, Japan 840-8502

TEL：0952-28-8333 FAX：0952-28-8215

<https://museum.saga-u.ac.jp/>